

いろいろなことを教えてくれる子どもたち (10)

村 石 京 子

○おだんごやさんのこと

ある晴れた日、5才児はみんなで手をつないで大学構内を散歩に行きました。そして草原に生えているよもぎをたくさん摘んで来ました。

「これでおだんごを作っておだんごやさんごっこをしましょう。」と話しかけると、おだんごやさんと聞いただけでも嬉しくて、みんなにこにこしてしまいます。「本当に食べられるおだんご？」「明日しようよ」などと口々に言ってきました。でも実際にお店を開くとなれば、材料もよもぎだけでお団子が出るわけではありませんから、いろいろなものを充分に用意しておかなくてはなりません。また、どんな手順でやればスムーズに運ぶだろうかを考えてから、よもぎをあくぬきしてすりつぶすところから、こねてまるめてむしり、出来上ってきな粉にまぶすところまで一度実際にやってみなくてはなりません。

子どもたちは楽しみにしているのに、大人の方があれやこれやと用事がたてこんでしまつて、準備がなかなか整いません。「おだんごやさん、いつやるの？」と聞かれても、「明日やりましょうね。」という言葉を出せないで何日か過ぎておりました。A夫はなかでもお店屋ごっこが大好きな子でしたので、期待著るしく、しょつ中「いったいいつやるの。」と真面目な顔をして聞きますので、私はこう返事をしました。「おだんごのもとになる粉やお砂糖を買つて来て、用意が出来たらするから待っていて頂戴ね。」「ふうん、わかつたよ、用意があるんだね。」と納得したような顔でした。けれど、次の日になるとA夫は、「先生、おだんごの粉買つて来た？ まだ買つて来ないの？ 早くしてよ」と矢のさいそくです。私は隣の級のK先生と、「子どもたちが楽しみにしているから、なるべく早くやりましょうね。」と話しあつておりました。

そして二、三日経つたある日、子どもたちが帰つたあとの保育室の片づけをしていたとき、教卓の上に手紙がおいてあるのを見つけました。開いて見るとA夫の字で、「せんせい、おだんごのこなをひとふくろあげます」と書いてありました。その一行の手紙には、書いていないいろいろの言葉がいっぱい聞こえてくる気がして、可愛くて笑いながら読んだにもかかわらず、胸がキュツとなるような思いでした。大人のいろいろな事情や都合などで、子どもの期待をいつまでも引きのばしてはいけなさと、しみじみ思つたものです。そして大人が考える以上に、子どもは純粹な心で、いろいろなことが実現出来ることを待ちのぞんでいるのだと知りました。

そして待つこと久しく、いよいよおだんごやさんが開店したその日は、子どもたちはとても楽しく喜んで参加してくれましたし、A夫はといえば看板書きからはじまって、よもぎひきや、おだんごこね、そしてお客さまへのサービスと全くいそがしくはりきった一日でした。「本物のおだんご屋さんと同じか、それ以上においしかったです」というのが、およばれたお母様たちの嬉しい感想でした。

### ○子どものイメージするもの

5才児位になると、子どもたちは実にいろいろな想像力（イマジネーション）と創造力（クリエイション）が豊かになってきて、驚かされることがあります。子どもたちは自分でイメージしたものを、何とか形の上に現わしたいと一生懸命とりくむようになってきます。

N男は、そうした子どもたちの中でも、きわだって熱中する子どもでした。砂場遊びが大好きで、砂場に入っているとき、N男にとって幼稚園の砂場は、道路工事現場であったり、船つき場であったり、ダム建設場であったりしています。そして思う存分遊びこむと、満足したように砂場から上ってきます。工作をするのも大好きです。あるときは銀河鉄道スリーナインをつくり、それが出来ると宇宙基地へ向かってゆうゆうと旅立たせていくその様子を見ていると、何か見事とさえ言える程、自分の考えを遊びの中に投入させているのです。そのひたむきな有様の中には、私ども大人の入りこむ余地がないような思

いさえて、そうっと見守っているだけのことが多くありました。けれどまた、やっぱりN男の心の中を見るのは、外側から見ていたのではなく、彼と会話し、彼と一緒に作業をすることなのだ、迷ってしまう毎日でした。

ある日のことです。N男はダンボール箱をほしいと言ってきました。車をつくるのだというところで、N男のつくったのは外装は簡単な窓わくとドアの形が書いてあるだけのものですが、中の部品がいろいろと取りつけてあります。ハンドルは勿論ついていますし、その他にはメーターもあるし、オートマチック車らしきギアまでもついています。一日目に出来たものは、外側から見ると、簡単な箱車の感じですが、N男にとっては納得のいくものだったらしく、早速試乗開始しました。ダンボール箱の車の中にすっぽりと入って、幼稚園の長い廊下をかんだまトコトコと足でこぎながら行ったり来たりして遊んでいます。まわりで見つけた友だちは、「かっこいい!」とか「タクシーなんでしょ、乗せてよ」などと言って、代りあって乗せてもらいますが、小型のダンボール箱の中にしゃがんで入って、足でこいで進むのはかなり大へんなことらしく、他の子はあまり長続きしない様子でした。N男はその後また満足そうに乗っています。

次の日の朝、登園するとN男はすぐに「今日は車に屋根をつけなくちゃね。」と言って厚紙をもらい、屋根を組み立てようとしています。なかなかN男一人の手ではうまくとりつけられないので、大人もちょっと手助けしてこわれないように補強してあげました。N男はガンリンやオイルを充分に入れたみたいです。そして、一人乗りの車に小さくかがんで

入りこむと、N男の姿はもう車の中です。ダンボール箱の乗用車は今日も廊下をトコトコと走っています。

私はしばらく遊戯室で他の子と遊んでいましたが、N男の車は遊戯室まで入って来て、私のそばで止まりました。汗びっしょりになって中から顔を出したN男は「大へんなんだよ、これ走らせるのは……。」と半ば得意そうに、半ば疲れたという表情で言いました。そこで私はふと思いついて、遊戯室にある車輪のついたブロックを、N男の車の底部にガムテープで接着してみることを提案しました。二人してその車輪をつけて見ると、後から誰かに押しもらえば、今度はダンボール箱の車は実にスムーズに走ります。私はとてもいいことに気づいたと嬉しくなり、N男もきつと喜んでいました。これなら友達と一緒に遊べるでしょう。先ずN男が乗って私が後から押してみると、快適に車は走りました。ところが車が止まって中から出て来たN男は、「駄目だよ、これじゃ」と言っせっかく今つけた車輪をガムテープをばりばりとはがしてはしまいました。私はそれでもN男の考えがよくわからずに「どうして？」などと聞いてみますと、「僕の車だから、僕が運転するんだよ」とはっきりと告げられて、やっとのみこめたのです。

N男は自分の車をつくりたいと思って、昨日からそれに取りくんできました。車の中はとてもよく整備されていましたし、故障に備えての修理用のスペナマでつくられてありました。それを見て知っていたのに、私にはN男の心の中までは読めていなかったのです。車の中に入ると、もう外部とは遮断されていかにも車に乗っているという気分だったので

しよう。塗装はあまりきれいに出来てはいませんが、彼にとっては、外側のことなどはあまり問題ではありません。ましてや、自分の車を自分で運転しようと考えていたのに、後から誰かに押ししてもらわなければ動かない車なんて、それがいくらスルスルと走ったとしても、彼のイメージしていたものとは全くあわなかったのです。

大人の平凡な発想から、車輪をつけてよく走ればよいと考えたり、一台の車に交互に乗って友だち同士のかかわりあいも出来たらよいなどと思ってしまったものですが、N男の頭の中には、自分でつくった車を自分で運転したいということで一ぱいだったのです。それは大人から見ると足が疲れてさぞ大へんだろうと思ってしまうのですが、N男にとってそのことはあまり大したことではなく、自分でつくりあげた車を自分自身で走らせるのだという満足感と較べたら全く小さなことだったようでした。

このことによって私は大人のかたまってしまった発想の貧しさを恥ずかしく思ったと同時に、やはり子どもと真正面からつきあい、話し合わないと、子どもの心の中にあるものを充分理解出来ないのだと強く思ったのです。一通りだけを見て、充分に子どもの中の心の中を読みとることをしないで、物事を処理していることがしばしばあるのではないだろうかと反省しました。そして、子どもとよく向かいあうことをするとともに、一人一人の子どものイメージするものを、もっとももっと大切にしていかなければならないと思ったのです。

（お茶の水女子大附属幼稚園）